

病児保育奮闘記

(20)

子どもサポート H&K
大石 仁美

はじめに

今年は本当に災害の多い年でした。火山活動に始まって、大雪、地震、集中豪雨、けたはずれの大型台風の連続。日本列島北から南まで、ずたずたに傷ついて、心休まることなく次々おこる災害に、天の怒りを感じ、祈ることしか出来ませんでした。被災に遭った皆様方、どうぞ一日もはやく、日常を取り戻すことが出来ますよう、お祈りいたします。

怖かった台風 21 号

強烈な台風がやってくるということは、事前に予測されるようになり、何日のほぼ何時ごろ、どのコースをとり、どのくらいのスピードで、いままで経験したことのない強烈な雨風をとまなう等、情報がほぼ正確に提供されるようになったのですから、時代のすごさを感じます。とはいうもののさて、前もってどんなことをしておけばいいのか、窓のすだれを畳んだり、外の植木鉢等を玄関内に入れたりする程度で、なにをどうしていいのか、何とも頼りない話で、体験がないということは、情報がいくらあってもなかなか行動にはつながらず、不安なまま当日を迎えた次第です。

病児保育室はというと、前日の段階で保育園はどこも休園が決まったため、保護者から一時保育の予約が入り始めました。会員さんからは、

急な時も対応してほしいという要望が高かったのですが、どうしても休めない保護者のお子さんは、一時保育をしてきました。嵐が来ようが、なにがあろうが、休めない仕事というのは存在します。自分にしか出来ない仕事、特に人の命を預かる仕事です。保育園が休園なのは危険を伴うかも知れないという判断からなのに、ここでその子たちを預かるということも変な話ですが、それが私たちの使命です。

当日は13名の子どもたちがやってきました。皆元気なのでとても賑やか。各々好きな玩具で遊び、小さい子たちは、保育士さんのお膝を取り合いしながら、絵本を読んでもらってご機嫌でした。

私はと言うと、前日から煮込んであったミンチ肉と野菜のスープを子どもの年齢に合わせて、カレーに仕上げ、色がきれいでボリュームが出るようトッピング材の準備。どんな色がいかなあ〜と楽しみながら、まずは湯がいたかぼちゃとブロッコリーで飾り、レッドピーマンをのせて、フムフムこれでいかなあ、子どもたち喜んでくれるかなあと子どもの顔を思い浮かべながら昼食の準備をしていました。

普段、大勢でワイワイ言いながら一緒に食べることはないの、「おかわり！」と言ってもらえるととても嬉しいのです。

子どもはカレーが大好き。案の定「おかわり」が出て嬉しい悲鳴。ほぼ全員が完食でした。

昼食が終わると子どもは午睡に入ります。台風のパークは午後3時～5時ごろとの予測。まだ風はさほど吹いておらず、外の様子を気にしながら、緊張をもって子どもを寝かせつけました。

こども達が寝息をたてはじめたころ、そっと窓の隙間から外の様子を伺うと、雨風も少し強くなってきた様子。早めに仕事を切り上げて、子どもをお迎えに来られた保護者の方も数人おられて、午後から子どもは少しずつ減り、3時頃には8人になりました。

午睡から目覚めた子どもたちはそれぞれに活動開始。皆でおやつを食べた後、プラレールに興じる子、床にジグソーパズルのパーツを広げて夢中になっている子、折り紙の本を熱心に見ながら、ひとりで挑戦している子、お絵かきがもっとしたい 紙！紙！ と騒いでいる子、ハイハイの月齢の子は、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちの間を這ってじゃましてご満悦。皆、自分の好きな場所を陣取って個性満開です。子どもたちには台風なんて関係なし。時々、そうっと窓の隙間から様子伺いして、「台風はやく過ぎ去って！」と時間待ちして祈っているのは、私だけのようでした。

うわっ。なにかが飛んできた！

施設は小さなボロやの二階建てで、吹き飛ばされそうな家ですが、ゴーと荒れ狂う風の音もさほど響かず、窓がガタガタ揺れることもなく、強烈台風どうしたの？未だ来ていないの？と思うほどに、パーク時を過ぎても支障なく、不思議なことですが、小さな家が前後左右寄り添うように建っているの、風の通り道がないということなのかなあと思ったりしていました。

ところがほどなくして、**ドスーン!! スドーン！バリバリ ドカーン！** と爆音が家の前

で響き渡り、「なんや、どうした どうした、何かが飛んできたんや」家が壊れる恐怖が一瞬脳裏を襲い、こわごわ窓を少し開けて覗いてみると、車が一台やっと止まれるくらいの小さな駐車スペースに、まるで狙い撃ちでもしたように、巾30cm、長さ4～5mほどの建築資材のようなものが積み重なって収まっているのです。「いったい何処から？これはなんなの??」全く見当もつきません。

そして停電！

後から分かったことですが、この停電は8時間近くも続いたようでした。

次第に薄暗くなって、心細くなってきたころ、保護者のお迎えで一人、二人と帰って行きました。ところが夕刻6時を過ぎても最後に残った兄弟二人の保護者が現れません。母親に電話を入れると、一時間延長してほしいとの事。7時を回ってもう一度電話をすると、父親がお迎えに行くまで待ってほしいとの事。結局お迎えは8時を回っていました。停電の真っ暗の中、小さな懐中電灯一本で、おなかをすかせた兄弟と保育士が、身を寄せ合って、お菓子を食べたり、気を紛らわせたりしながら過ごしたこの2時間は、台風が去ったとはいえ、忘れられない怖い思い出として、子どもたちの心に残るような気がします。ご両親ともよほどのことがあったのだと思いますが、あとで心細い思いをしたお子さんの心の手当てをしてくださったのか、気になるところです。

さて、翌朝出勤したところ、ご近所さんが数人集まって、台風の傷跡を見渡しながら、おしゃべりをしているところに出くわしました。「ほら、あの三階のベランダが鉄柱ごと吹き飛んで、Nさんとこの駐車場の屋根に突き刺さってるで。えらいこっちゃなあ。さらにそのまんまドサッと床ごと落ちて、私道をふさいでしまってる。」「あれ、あれはベランダかいな。道通れへんで困ってるねん。」「どうしたらええのやろ」「京都市に電話したら、どこのものか分からないものは回収するのでまとめて置いといて

たらええらしいけど、何時になるかはわからんらしい」「困ったなあ」「うちは停電が長引いて晩御飯食べられへんかったわ。」「ごはん炊けへんし」「そりゃ困ったなあ」

年配のご近所さんたちの会話を聞きながら、改めて周囲を見渡すと、道路や家々の玄関回りやら、正体不明の残骸が飛び散って、手の付けられない有様。台風の凄さをまざまざと見せつけられたのです。昨夜は暗くてよくわからないまま帰宅したのです。

で、我施設前の大きなこの残骸はなに？しばらくして道路を隔てたお向かいさんが、やってきました。「申し訳ない。これうちでした。三階の屋根の上の見晴台（大文字を見るための）がそのままバラバラに飛んでいったのが分かりました。処理場へ捨てに行ってきます。」と車の荷台に積み込み始めました。ご近所さんも手伝って、みんなで車に積みました。「ついでやさかい、他にもあったら持ってきて！」「よかった！」5～6人が思案に暮れていたごみを積み込み、車は満杯。すっかり周囲がきれいになり、気持ちよくなりました。この日、今まで交流のなかったご近所さんとすこし話が出来、一緒に作業が出来たのは良かったです。人と繋がりが、一緒になにかをするというのは気持ちが良いものです。こういうことでもない限り、住民でない私が、井戸端会議に参加する機会はないですから。

さて、この後、毎日のように雨が降り、うんざり。なんと**雨漏り**がはじまりました。これは大変！ 応急手当だけでもしてもらわないと、業者にいくつか連絡してみたものの、すべてアウト。全国どこも被害を受けているので、人がいないのです。仕方がないと放っておくわけにはいきません。病気の子どもがやってくるのですから。雨漏りは玄関上の窓際ですが、気持ちのいいものではありません。また今日も雨が降ると思うだけで、気が滅入ります。

どうしたものか。すっかり行き詰まって、仕事を降りている小川に「ねえ、あなたの知り合いに屋根を直せる人はいないの？」とぼやいて

みたら「う～ん、全く心当たりなしだなあ～でも、まてよ。」と卒業名簿を繰って、「あっ、一級建築士がいた。でも、現場の人じゃないから関係ないかも。」と言いつつ、SNSで発信してみると、すぐ返事が返ってきました。たまたま午後は空いているので、すぐ見に行きますと。

急展開になってきました。

50代の人好きそうな卒業生は、ドローンで屋根を撮影し、とにかく今は職人がいないので、何時になるか保障はできないけど・・・と言いつつ帰っていかれました。そうだよ、何時になるか分からないよね。いくつか電話したところは皆、断られたんだから。そう思って、少し期待しつつも、大きな期待はせずにいましたら、一週間経って、今から、職人さんを行かせますとの電話。へえ～ホント！？ やってきた職人さん、写真を見ながら、傷んでいるところをチェックしつつ、あっという間に瓦を入れ替え、直った状態を撮影し、SNSで一級建築士のOさんへ送信。わずか30分程度で作業終了。「すごい！」

なんだか不思議な気持ちです。有難い!!嬉しい!しあわせ!

洛星ファミリーのすごさを感じたのは今回だけではありません。卒業生同士のネットワークの強さ、教師も含めて、繋がりの深さに驚かされることもしばしばでしたが、これが教育の持つ力なのでしょうね。多感な青春時代を同じ学び舎ですごし、切磋琢磨して過ごした生徒同士の友情は、人生の土台としてしっかり根づいていて、そこに教師も加わっているというのがすごいところです。

人は、単純にいうと、どこで学び、誰と交流があり繋がっているか、そのことが人生を切り拓くうえで大きな財産となることを、改めて思い知ったのです。